平成21年度喜多方市小学校農業科シンポジウム

パネルディスカッション「地域と共に歩む小学校農業科」の概要

【パネラー】

喜多方市立慶徳小学校校長	田代　義秀　氏
喜多方市熱塩小学校農業科支援員・有機栽培農家	小林　芳正　氏
喜多方市立堂島小学校父母と教師の会会長	大塚　則嘉　氏

【コーディネーター】

福島大学行政政策学類教授	境野　健兒　氏

Ⅰ　意見発表

1　喜多方市立慶徳小学校校長　田代　義秀　氏

慶徳小学校の学区は，豊かな自然環境に恵まれた農村地域であるとともに，熊野神社長床，新宮城址，慶徳稲荷神社お田植え祭りなど伝統や文化のあふれる地域でもあります。これまで，総合学習の時間に5年生の児童が地域の方の田んぼを借りて，田植えや稲刈りの体験活動を実施し，
その収穫した米を使って，餅つきをして収穫の喜びを味わわせていただいてきました。

農業科の実施にあたっては，支援員としてこれまで総合的な学習の時間での農業体験を支援してくださった方にそのまま引き受けいただくとともに，その外の地域の方も紹介いただき，農業科の趣旨や内容を説明しご快諾いただき，今年度11名の方に支援員になっていただいています。また，支援員のみなさんとの打ち合わせを昨年のうちに済ませ，圃場の場所や栽培する作物，担当学年や役割分担等を決め，スムーズな農業科のスタートに備えました。

このような経過を経て平成21年4月より，「学ぼう，育とう，人，自然，地域とともに」をテーマに掲げ，農業科の学習をスタートさせました。

45時間の農業科の学習では，田んぼで「こがねもち」という品種のもち米を育てました。また，7aの畑では，「ジャガイモ」「サツマイモ」「ニンジン」「ダイコン」「ハクサイ」「ダイズ」「ラッカセイ」の7種類の野菜を栽培しました。学年ごとに栽培する作物を決め，支援員の方に指導していただきながら活動を進めました。その農業科のまとめとして，10月31日の土曜日に「収穫感謝祭」を開催しました。農業科に関わらず普段お世話になっている地域の方々を招待し，感謝の心があふれる行事にするというねらいで実施しました。感謝祭には，支援員の方をはじめ，地域の方，家族の方，合わせて200人以上のみなさんに参加していただき，農業科で育てて収穫した作物を調理し，もち，いも汁，野菜サラダ，漬物，

落花生の塩茹などをみんなで試食しました。その他にも子どもたちの企画で祭りを盛り上げました。いろいろ課題はありましたが，保護者や支援員の方々の協力で大成功に終えることができました。

このような取組みを通して,「かかわりを通してこそ本当の教育ができる」という本校の教育理念に農業科が合致していることを強く感じました。11 名の支援員の方には，大きな支援をいただき農業科を進めることができました。ご自身の畑の作業が忙しい中，何度も学校や畑に足を運んでいただいています。天候やタイミングを逃さず支援や指導をしていただきました。この農業科の学習を通して，先生は「学校の教員」だけと思っていた子どもたちが，地域のすべての人から学ぶことができるということに気づいてくれたのではないかと思います。さらに，子どもたち自身が地域の一員として，地域の方々に支えられて生きるという「地域とのつながり」を再発見したのではないかと思っています。また，この体験を通して「命の尊さ」「自然や環境の大切さ」「郷土を愛する心」なども育ってきていると思います。子どもたちの成長については，さらに様々な面から検証し次年度へつなげていきたいと思います。

最後にこの 1 年間を通して 3 つのことを感じました。1 つ目は「感謝」です。支援員の方々は本当に農業に誇りをもって取組み，農業が大好きな方ばかりです。そのことが支援員の方の言葉や行動から強く感じられました。苦労を厭わず支援していただいた支援員の方々に感謝申し上げます。２つ目に「感動」です。黒い大根，切ると中が赤い大根など 12 種類もの大根の収穫や落花生の実のでき方など新しい発見があり感動しました。3 つ目は「納得」です。子どもたちだけでなく私自身も，店に売っている農産物しか知りませんでしたが，本当の農業の姿を知ることができました真から納得する場面が数多くありました。

いろいろ課題はありましたが，農業科のスタートラインに立てた 1 年間でした。まだ 1 歩を歩みだしたばかりなので，これから取組みを反省したり検証したりしながら次年度につなげていきたいと思います。

2　小林芳正氏　熱塩小農業化支援員･有機栽培農家

私は熱塩加納の百姓です。まだ本物の百姓になりきれないでいます。農協に 30 年間勤め，それから 11 年間農業を営んできました。そういう意味では農業しかできない不器用な人間でもありますが，これだけ長く農業にかかわれたことは幸せなことだと思っています。また，仲間にも恵まれ農薬を使わない有機農法の里づくりを目指し,「我々が生産する農産物は食料になる」「食料は命の糧である」「その命の糧を生産する農業は命の産業である」という思いでこれまで歩んできました。

農業科が始まる以前，平成元年より熱塩加納の小・中学校では稲を育てる活動をしてきました。その活動には農協に勤めている時代から関わってきました。「なぜ，学校に農業をすすめるのか」それは，日本の農業は自然産業から化学肥料や機械を使う工業的なものに変わってきました。これでは農業者の想いが届かない

ものになってしまうと思ったからです。

3年前に喜多方市で小学校農業科が設置されることを知り,「これで自分の想いが発揮できる。」と考え，熱塩小学校に自ら乗り込んでいき支援員になりました。それから農業科が始まり3年が経ち，今年も「66人の子どもたちの心の中にどんな種を蒔いたらよいか。」と365日考えて取組んでいます。子どもたちに鍬の使い方などの技術的なことを教えることも大切かもしれませんが，ただ教えるのではなく子どもたちが自ら学ぶ状況や学べる場を大人がどのようにつくっていくかということが大切だと思っています。

親しくさせていただいている山形県高畠町の小学校の校長先生が,「田んぼや畑は子どもたちにとって教室だ。大地や自然，作物は先生だ。」と言っています。子どもたちは大地や自然からたくさんのことを学んでいる。小学校農業科の真の目的は人間形成の基盤づくりではないかと思います。農業や自然を通して慈しむ，優しさ，思いやりなどの人として必要なものを身につけていって欲しいと思っています。そのためには，子どもたちに伝える側の私たち大人も「感性が豊かであること」「思いやりがあること」「優しさなどの人間性を身につけること」が大切ではないかと思います。

熱塩小学校はまったく農薬や化学肥料を使わないで作物を育てています。先人が苦労して身に付けてきたことを生かし，自然に近い形で農業を進めなければならない。そうでないと学べるものが少なくなってしまう。「農業は草取りが大変だ」ということを農業で学ぶのではなく，自然を相手に取組む農業の大変さを知ることで，それを乗り越える何かを感じ学び取っていって欲しいと思っています。さらに，楽しくなければならないということです。田んぼや畑から歓声が沸く農業科でありたいと思っています。熱塩小学校では10アールの田んぼと14アールの畑を使用しています。その田畑が子どもたちにとって「自由に使える」「遊べる空間」にしていかなければと考えています。

最後に地域に発信ができる，やりがいのある農業科でありたいと思っています。長いカボチャにカンドウカボチャと名をつけ栽培しました。それを子どもたちが1人暮らしの方に配りました。また，家に持ち帰って食べると「このカボチャうまいな」と家族や地域の中で話が広がっていきました。学校給食を考える会では，小学校がまごころ野菜の会に入り有機農法で育てた野菜を調理場に持ち込み給食に利用できるようにしています。米の食品鑑定コンクールでは特別優秀賞をいただきました。これからも，この農業科が子どもたちの心を育てる素晴らしいものにしていきたいと思っています。

3 大塚則嘉 堂島小学校PTA会長

堂島小学校で取組んでいる農業科について「経過」「取り組み」「子どもたちの感じたこと」の3つに分けてお話したいと思います。

堂島小学校では，ＰＴＡ活動の大きな目標として「地域が子どもを育てる」を掲げ，そのために「教師」「保護者」「地域」が一体となり活動に取組んでいます。

農業科の前身とも言える栽培活動に昭和62年から取組み，すでに23年目を迎えました。当時ＰＴＡが子どもたちのためにできることは何かないかと考え，子どもたちが家の中で遊ぶことが多くなってきた中で，堂島地域の文化とも言える稲作を子どもたちに体験させたいという願いから始まったものです。支援員は当時から地域のお年寄りにお願いし，2 年ごとに交代し長年培ってきたことを生かして稲作の指導にあたっていただいています。さらに土地については，ありがたいことに23年前から同じ水田を無償で利用させていただいています。このような地域をあげた協力体制が長年この活動を継続させてきた大きな要因であると思います。

二つ目の取組みについてですが，ＰＴＡの栽培委員会と支援員が中心となりこの栽培活動の支援をしています。4 月にオリエンテーションとして支援員との顔合わせと種もみ蒔きを行います。5月の田植え時には条板で田んぼに線を引き，6月にはコロバシを使った除草を行っています。秋には稲刈りを行います。鎌を使いすべて刈り取ります。その後，天日干しをして脱穀です。脱穀は地域の農家の方から昔使っていた足踏み脱穀機を借りて脱穀に取組んでいます。とても大変な作業ですが，子どもたちは喜んで楽しく取り組んでいます。様々な場面で，上級生が下級生に教えながら取り組む体制ができています。そして11月には堂島フェスティバルを開催し，地域の方を招待しみんなでその年の収穫物を味わっています。このように，収穫まですべて手作業で取組む大変さを感じながら，収穫の喜びを味わっています。その他にも，わら細工教室を行っています。これは，地域のお年寄りの方に指導していただき，なわないやタワシ作りをしました。私たち保護者にとっても初めてで素晴らしい体験になりました。稲作のほかに畑作では野菜も栽培しています。収穫したものは給食で食べたり，芋汁の鍋に入れたりして味わいました。

もう一つ，現在ＰＴＡ参加型の教育を進めています。稲作の活動の日を授業参観に位置づけてもらい，子どもたちと一緒に稲作の体験をしてもらうようにしています。これは支援員の高齢化が進み，世代交代を考え，将来指導できる人材を育てようという目的で行っています。また，これだけ長く続いてくるとＰＴＡ会員の中にも自分が子どもの時代に栽培活動で稲作をしたという人も出てきています。この活動は堂島地域の財産になりつつあります。

最後に子どもたちの感想ですが，反省や作文では「めんどくさい」「むずかしい」という内容のものもありました。しかし、5 年生のある児童の作文では「ニンジンが２本も一緒に取れた」「自分がとったニンジンが給食でみんなに食べてもらえてうれしい」と書いていました。私たちＰＴＡは，これからも子どもたちに感動を与える栽培活動・農業科を支援していきたいと思います。

Ⅱ　ディスカッション・質問・意見等

境野　健兒氏

農業科は平成 19 年度 3 校で始まり 20 年度 6 校，21 年度に 5 校が加わり現在 14 校で実施されている。今，パネラーの方の発表にあったように，地域ごとにそれぞれ特徴はありますが、地域のとの関わりをもって農業科を進めています。それらの地域のかかわりやパネラーの発表に質問や意見をお願いします。

山形県からの参加者

「地域の活性化を図る小学校農業科」というこのような催しを実施された市長は素晴らしいと思います。私たちの住んでいる地域の小学校で農業体験を進めていた時に，学校の先生方は「なぜ学校で農業を教えるのか」と消極的でした。実施から 3 年ぐらいで農業体験がやっと根付いてきました。喜多方市はこんなにも多くの学校の児童が農業科に取り組まれていて感動しました。

境野　健兒氏

今ご意見をいただいた方の町では,給食の野菜の自給率 50%を目標に取組まれ,農業を大切にしながら研究会や発表会を開いて話し合いをしているそうです。その中で「学校の先生が何で農業を教えるんだ。」という話があったそうです。学校での先生方の受け止め方はどうでしたか。

田代　義秀氏

私も農業の経験がありません。その点ではじまるまで不安はあったのですが,農業科の目的は技能を学ぶことが重要なのではなく,農業という体験を通して「自然の大切さ」「命の尊さ」「勤労の大切さ」「人とのかかわり」などを子どもたちに気付かせることをねらいにしていると思っています。このことは，準備段階で教育委員会や職員会議等で話し合い，共通理解を図りました。そして，実際の体験を通して，その内容に驚き感動しました。農業を通して子どもたちを育てることに魅力を感じました。職員も同じ気持ちで取り組んでいると思います。

埼玉県からの参加者

埼玉県でも,この喜多方市を手本に平成 23 年度までにすべての小中学校で農業体験を取り入れようと進めているところです。つきましては、いくつか質問させてください。

まず，どのような方が支援員になっているのか。そしてその支援員を見つけるのはどのような方法をとっているかです。次に借りている土地や支援員への謝礼はどうなっているのか。田畑の栽培の時の中間管理はどうしているのか。最後に現在喜多方市の小学校で農業科に参加していない学校の参加していない理由があれば教えてください。

小林　芳正氏

支援員はたくさんいた方がいいというわけではなく，中心的な人がいればよい

と思っています。熱塩小学校では支援員は２人しかいませんが，近所のお年寄りに声をかけるとボランティアで協力してくださっています。学校から声がかかるとみんな喜んできてくれています。学校でもそんな地域の方を収穫祭等に招待してくれている。それだけでよい関係ができると思います。

先ほどの内容ですが，うちの校長先生は農業のことをまったく知りません。しかし、ことあるごとに感動しています。先生方が感動してこそ，子どもたちにも伝わっていくのではないかと思います。もう１つ提案したいのは子どもたちが丹精込めて栽培した作物を提供できる場をつくっていただきたいと思っています。できれば、販売し欲しい方に手渡しで渡せる場をつくっていただきたいと思っています。

渡部　裕（喜多方市教育委員会農業科担当）

農業科を実施する際に原則として無理をしないということにしました。どんなものができても「いい」とか「悪い」とか絶対言わない。学校で農業科を実施するのは「いいもの」を栽培することを目的にするのではなく,「農業を通して学ぶ」ことを大切して欲しいと考えています。そのため，実施可能な学校から取組み始め，３校から始まり現在 14 校まで実施校を拡大しています。さらに，現在実施していない学校は 400～500 人規模の学校で圃場の問題があります。実施に向けて，学年別や取組みの方法を工夫していきたいと考えています。

支援員の方ついては，どなたになっていただいてもいいと考えています。学校でお願いし引き受けていただいた方については，すべて支援員として委嘱しています。学校によってはリーダーとなる方だけのところや 10 名以上支援員のいるところもあります。さらに，支援員以外の方でも活動に協力してくださる方が増えてきています。これらの支援員への謝金については一切お支払いしていません。準備段階では講師として謝礼を考えていた時期もありましたが，支援員の方々から「私達はお金のために支援員をやるのではなく，地域の宝である子どもたちを育てるためにやるんだ」というお話をいただきました。そのようなありがたい言葉で支援員の方はボランティアという形になりました。それは喜多方市農業科を進める上でも大きなメリットになりました。

大塚　則嘉氏

中間管理については，学校で子どもたちが観察したことに支援員の方がアドバイスしたり，支援員の方が自ら田畑にいって観察したりしています。

新潟県からの参加者

私は以前，高校の農業科の教員をしていました。生徒は高校で農業を学んでいくのですが，卒業後は他の職業についてしまうことが多くありました。私は農業科の教員をしていて何を指導しているのだろうと思うことがよくありました。ある時，卒業生に看護士になりたいという生徒がいました。看護士の資格を取るこ

とは勉強などとても大変だったそうです。その生徒と話をすると，高校の時畜産科で動物の世話をするのがとても嫌だったそうです。しかし，やらなければ動物は生きていけない。そんな気持ちもあったからこそ，卒業までやり遂げることができ，自信がついたそうです。あの経験が介護士をめざす際に，困難を乗り越える力になったということを話してくれました。

このような人間の力を育てる農業を子どものうちから行うことは素晴らしい取り組みだと思いました。

豊川小学校農業科支援員

豊川小学校で水稲の支援員をしています。これからも支援員を続けていきたいと思っていますが，支援員としてどのようなことに注意して取組んでいけばよいかアドバイスをお願いします。

小林　芳正氏

どのように関わっていけばよいか考えると，私は「教える」という言葉を一切使いません。また，子どもたちに私のことを「小林さん」「先生」とは呼ばせていません。「芳正さん」と呼ばせて友達のような感覚で接しています。この農業活動を通し子どもたちは成長してきました。しかし，目に見えない面もあります。子どもたちの心の中に蒔いた種が 5 年，10 年，20 年かけて芽をだしてくれるだろうと思います。即効的に成長が感じられるものではなく，大人が長い目で成長を待つという気持ちももつことが大切だと思います。

大塚　則嘉氏

支援員は地域のおじいちゃんやおばあちゃんにやっていただいています。普段，子どもとお年寄りの関わりはほとんどないように思えます。しかし，この農業科の支援員として関わりをもってもらうことによって，子どもたちの顔や名前を覚えてもらえる。2 年ごとに支援員を交代していくことでそのような方が増えていく。それが農業科の活動だけでなく，子ども見守り隊など、子どもたちの安全を守る活動の充実につながり，よりよい地域づくりができるのではないかと思います。

田代　義秀氏

支援員の方で 70 代の男性がいます。その方は私以上に若々しく，畑の作業や農業の話をするのを見ると，とても生き生きしています。今年度は支援員の方に圃場で専門的な技能や方法を指導していただいてきました。来年度はそれに加えて，教室の中で農業の素晴らしさや大変さ，経験談などを話していただける機会をもちたいと考えています。私たちもたくさんのことを学ばせていただき感謝しています。

宮城県からの参加者

私は食育に関わる仕事をしています。農業の体験を学校に進めようと話をする

と，学校では「学力向上が重点になっているので」などと消極的です。このような点で先生方や教育委員会の方からご意見お願いいたします。

渡部　裕（喜多方市教育委員会農業科担当）

農業科を始める際に必要以上に時間をかけないでくださいと各学校に話をしました。よい作物を育てるということが目的ではなく，農業を学ぶことを目的とし，「無理をしないで」「できる範囲で取り組む」ようにしています。もちろん，喜多方市でも学力向上は重点事項になっていて，その点でも力を入れて取り組んでいます。忘れてならないのは「喜多方らしい子どもを育てる」ということを目的に学力だけでなく農業科にも取組んでいるということです。

境野　健兒氏

今までの話の中で先生についての話がよくでてきました。先生といえば学級担任をして教科を教える人であり，農業を教えるとは思っていなかったと思います。子どもたちの学びの世界を，学校だけで育てられるのかということを考える時，学校で学べるものはごく一部であり，逆に農業科は様々な面から学ぶことができるものではないと思います。子どもたちを育てるのは学校の教科だけではないと考え，始まったものが喜多方市では農業科だったのだと思います。喜多方市では市の特色でもある農業からも子どもたちの生きる力を育てようとしています。学力問題を考えると，このような取組みが子どもたちに自信をもたせ教科学習の意欲の向上にもつながっていくと思います。農業科は生きる力など幅広い力を身につけされられるものであると思います。

もう１つは地域づくりについてです。堂島の取り組みは 23 年間も続き，世代を越えたものになっています。関わりが少なくなっている時代の中で，この農業科というものを通して学校を開くことにより，子どもたちとお年寄りの交流，ＰＴＡや地域の交流ができています。農業科に取組んでいる地域は「地域が子どもたちを育てる」という形ができてきているのではないか思います。これからも様々な力を生み出す農業科を推進していって欲しいと思います。

最後に米作りから，わら細工まで取組むという発表もありました。これらのすべては文化です。その文化を伝える農業科は素晴らしいものだと思います。今，この活動は全国から注目され，埼玉，北海道，長野などでもやってみようと広がってきています。このようなシンポジウム等を通して様々な問題を探り，解決し発展させていって欲しいと願っています。